

□ 統括的展望

東条 碩夫

●ゴーストライター事件

2014年のクラシック音楽界で、良くも悪くも話題を集めたのは、「ゴーストライター問題」であったろう。佐村河内守の作品として人気を得ていた「交響曲第1番」が実は新垣隆（当時桐朋音楽大非常勤講師）による代作だったことが週刊誌上で暴露され、新垣本人が2月の記者会見でそれを認めて全容を告白したため、事件は一気にスキャンダルと化した。その記者会見はテレビも延々と生中継したほどで、日ごろクラシック音楽に関係のなかった人々までがこれに注目した。佐村河内自身も、3月に謝罪会見を行なった。ここまで世間の話題を集めたのは、佐村河内が被爆2世で、「耳が不自由」なために「現代のベートーヴェン」などと言われ、すでにジャーナリズムやマスコミの寵児となっていたためであろう。記者会見によれば、新垣がゴーストライターとして佐村河内のために書いた作品は、計70曲ほどあったとされる。

代作行為そのものは、たとえば活字の分野では昔から例のないことではない。音楽作品の場合は、これまであまり表ざたにならなかったことはないが、いずれにせよその是非には各論あろう。しかも今回、作品の構成などの細部の内容について佐村河内が新垣に図面等で綿密に指示し、一種のプロデューサー的な役割として関わっていたこともあるため、微妙なところもないわけではない。しかし、佐村河内自身が、自ら耳が全く聞こえないと偽りつつ、それを美談として自ら世にひろめ、作曲についてもマスコミに公然と虚偽を語ったりしたことについては、倫理観の問題として、許容の余地はない。

この作品を絶賛した楽界関係者たちも、ネット等で糾弾される事態にまでなった。だが、ひとつの作品が発表されるたびに、作曲家の「身体検査」を行なうわけにはゆくまい。また、純粋に作品そのものをどう評価するかは、聴き手個人の価値観、審美感覚にもよる。ただ、作品を作曲家の身体的ギャップなどの背景と絡めてことさらに持ち上げたりしたケースは、ジャーナリズムとしては、些か具合の悪いものだったであろう。

●日本にも縁の深い巨匠たちが世を去る

2014年は、わが国にもおなじみの巨匠指揮者たちが次々に世を去った。まずクラウディオ・アバドが1月20日にボローニャの自宅で他界した。享年80歳。前夏のルツェルン音楽祭では指揮したものの、秋の日本公演をキャンセルしたため、一部の方面では不安が広がっていたものであった。また2月2日には、かつて読響の常任指揮者として意欲的なレパートリー開拓を成し遂げたゲルト・アルブレヒトがベルリンの自宅で死去(78歳)、6月11日には同じく読響の常任指揮者だったラファエル・ブリュベック・デ・ブルゴスがスペインのバンブローナの病院で死去した(80歳)。そして7月13日にはロリン・マゼールが84歳で米国キャッスルトンの自宅で他界した。元気であれば同月のPMF客演指揮が実現していたはずであった。最後の来日は前年4月のミュンヘン・フィルとの演奏旅行だったが、その首席指揮者を、マゼールは体調不良という理由で1カ月前に辞任していたのである。次いで8月13日には、名リコーダー奏者としても知られていたフランス・ブリュッヘンがアムステルダムで79歳の生涯を閉じた。前年4月の新日本フィル客演指揮が最後の来日となった。そして、古楽器から現代音楽にいたる幅広いレパートリーの持主で、多くの作品の校訂でも知られたクリ

ストファー・ホグウッドも、9月24日にケンブリッジの自宅で世を去った。73歳。11月に東京都響を指揮するはずであった。

●巨匠たちのあとを継ぐ若手の台頭

一方、逝ける先達たちを継ぐように、有望な若手指揮者が目覚ましい勢いで台頭している。その数の多さはかつて例がなかったほどである。2014年にわが国を訪れた顔ぶれを見ても、まずフルシャ(81年チェコ生まれ、ブラハ・フィルハーモニアの音楽監督・首席指揮者)が東京都響首席客演指揮者として6月と9月に来日、またウルバンスキ(82年ポーランド、インディアナポリス響音楽監督)も東京都響首席客演指揮者として10月に来日、ともに珍しいレパートリーを披露した。フィンランドからはインキネン(80年、ニュージューランド響音楽監督)が日本フィル首席客演指揮者として6.11月に来日し実績を上げ、ロウヴァリ(85年、タンペレ・フィル芸術監督)も10月に東響へ客演した。ロシア出身のワシーリー・ベトレンコ(83年)はオスロ・フィル首席指揮者として3月に来日、カザフスタン生まれのプリバエフ(79年)は4月より日本センチュリー響の首席客演指揮者となった。一方、イタリア勢では、1月東京フィルに客演したパッティストーニ(87年)が好評を受けて2015年から同楽団の首席客演指揮者を務めることになり、またデスピノサ(78年)も5月にN響へ客演した。英国勢はハーディング(75年、スウェーデン放送響首席指揮者)が新日本フィルのMusic Partner of NJPとしておなじみであり、ティチャーティ(83年、グランドボーン音楽祭音楽監督)も2月にスコットランド室内管の首席指揮者として来日した。カナダ出身のネゼ＝セガン(75年)も、6月にフィラデルフィア管の音楽監督として来日している。今や飛ぶ鳥落とす勢いにあるベネズエラ出身のドゥダメル(81年)もウィーン・フィルと帯同して9月に来日したが、むしろ彼の真価は音楽監督を務めるロスアンゼルス・フィル(2015年春来日)の方で発揮されるだろう。この他、たまたま2014年には来日できなかったが、ロシア生まれのソビエフ(77年、ベルリン・ドイツ響首席、ボリショイ劇場音楽監督、トゥールーズ・キャピトル国立管)や、ラトヴィア生まれのネルソンス(78年、ボストン響とバーミンガム市響の各音楽監督)もいる。これに、未だ来日していないロシア生まれのキリル・ベトレンコ(72年、バイエルン州立歌劇場音楽監督)などを加えれば、今日、いかに世界の若手指揮者がメジャーなポストを得て活躍しているかが一目瞭然であろう。

日本の若手では、山田和樹(79年)が抜きん出て目覚ましい活躍を始めている。2012年9月に首席客演指揮者となったスイス・ロマンド管とは1シーズンに5週10回のコンサートを指揮する契約を結んでおり、7月には早くも日本公演を行ない、大成功を収めた。2014年秋よりモンテカルロ・フィルの首席客演指揮者をも兼任している。また彼は国内においても日本フィル正指揮者、東京混声合唱団音楽監督、横浜シンフォニエッタ音楽監督なども兼任するという活躍ぶりだ。日本人若手指揮者では他に、春のシーズンから神奈川フィルの常任指揮者に迎えられた川瀬賢太郎(84年)が目玉株だろう。

●国内オーケストラの意欲的な活動

演奏水準で言えば、読売日響、東京都響が相変わらず好調さを示し、日本フィルがラザレフ(首席指揮者)やインキネン(首席客演指揮者)らの力で急上昇中。東響も新音楽監督ノットのもとで、前任者スターン時代の緻密なアンサンブルを回復しつつある。在京楽団以外では、広島淳一がシェフを務める京都市響の高水準ぶりがひとまよ上った。

定期公演におけるレパートリーも、ひとところに比べれば、拡大されてきたと言えるだろう。2014年に取り上げられた珍しい作品の中には、マリピエロの交響曲(ゼツダ指揮東京フィル、5月定期)、カレル・フサの「この地球を神と崇める」(下野竜也指揮読響、9月)、ツィンマーマンの作品集(メッツマッハ

一指揮新日本フィル、7、9～10月）、マルティヌーの交響曲（フルシヤ指揮東京都響、9月）、キラルの「クシェサニ」（ウルバンスキ指揮東京都響、10月）などがある。その他、ブラピンズ指揮の名古屋フィルや、児玉宏指揮の大阪響もレパートリー開拓に意欲的な姿勢を示した。これらに対し、相変わらずプログラムが保守的で、名曲主義にとどまっているのがN響だ。定期では高齢者が圧倒的多数を占める会員をかかえているため動きがとれないとも言われるが、とって定期以外の公演でも、レパートリーを新規開拓する姿勢はさほど見られないようである。

各オーケストラの指揮者異動もいくつかあった。前述のように、東京響はスダグンの後任としてノットが音楽監督に就任、神奈川フィルは金聖響の後任として川瀬賢太郎が常任指揮者に就任した。また日本センチュリー響では、音楽監督・小泉和裕が退任して飯森範親が首席指揮者となった。この他、先の話だが、上岡敏之が新日本フィル音楽監督に就任する（2016年秋）ことも発表されており、大野和士の東京都響音楽監督就任（2015年春）と併せて日本人シェフをいただくオケが増加したことが注目される。東京シティ・フィルも、2015年4月より高関健を常任指揮者に迎えることを発表している。

その他、その出来事としては、「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」において、病から回復した小澤征爾がベルリオズの「幻想交響曲」を指揮、サイトウ・キネン・オーケストラを稀なほど燃え立たせたこと（9月）、また94歳のヴィンチャーマンが大阪フィルを指揮して滋味あふれる「マタイ受難曲」を聴かせたこと（11月）なども記憶されよう。また飯森範親と日本センチュリー響、および藤岡幸夫と関西フィルが「大坂秋の陣」と称し、同一日に同一会場で共通した傾向のレパートリーにより演奏会を行なったこと（9月）は、出来栄えはともかく、聴衆への斬新なアピールを試みる企画という点で評価されるだろう。この他、山形響と仙台フィル（小泉和裕指揮、7月）、日本センチュリー響と山形響（飯森範親指揮、10月）が合同演奏、日ごろ単独では不可能な大編成の大曲を演奏するという試みも続けられた。

●国内オペラも健闘

飯守泰次郎が新国立劇場オペラ芸術監督に就任、その第1弾のシーズン開幕公演として彼自身の指揮、クプファーの新演出で上演した「バルジファル」（10月）が大成功を収めたことは、これまで音楽面と舞台面との間に水準の格差が少なくなかった同劇場にとり、明るい話題となった。東京二期会も準・メルクルの指揮と、ミキエレットの斬新な演出による「イドメネオ」を上演、日本のオペラ舞台に一石を投じた（9月）。一方、藤原歌劇団は創立80周年記念として「ラ・ボエーム」を沼尻竜典指揮と岩田達宗演出で上演（11月）し、「名作オペラをオーソドックスな演出の舞台で」という同団の方針を堅持した。地方オペラでは、四国二期会の「魔笛」（8月）、仙台オペラ協会の「後宮よりの逃走」（6月）が好評だったが、セントラル愛知響が名古屋と東京で演奏会形式により上演した丹波明の「白峰」（井崎正浩指揮、9月）や、仙台発のオペラとして話題を呼んだ三善晃の「遠い帆」の14年ぶりの東京再演（佐藤正浩指揮、岩田達宗演出、8月）なども力作であった。

日ごろ減多に上演されない作品が不思議にかち合う——というケースは時々あるが、コルンゴルトの「死の都」の舞台日本初演が同時期にぶつかったのはまさに珍しい事例であろう。先陣はびわ湖ホールで、これを沼尻竜典指揮、栗山昌良のオリジナル演出により3月8日・9日に上演した。次いで新国立劇場が、キズリンク指揮と、フィンランド国立歌劇場のプロダクションによるホルテンの演出とで、3月12日から計5回の上演を行なった。評価は分かれるものの、それぞれ力作であったこ

とは間違いない。またヴェルディのグランドオペラ「ドン・カルロ」が年に計4種上演されたことも、珍しいケースであろう——うち舞台上演は東京二期会（フェッロ指揮、マクヴィカー演出、2月）、関西二期会（アジマン指揮、デ・ルチア新演出、10月）、新国立劇場（リッツォ指揮、マレリ演出の再演、11～12月）の3本。一方、東京芸術劇場制作「コンサートオペラ」での上演は演奏会形式で、これはバリ初演版を基本とした演奏のため「ドン・カルロス」と題されていた（佐藤正浩指揮、9月）。

演奏会形式上演のオペラとしてはその他、N響がデュトワの指揮で12月定期に取り上げた「ペレアスとメリザンド」、ヤノフスキ指揮N響が「東京・春・音楽祭」で演奏した「ラインの黄金」（4月）、セミステージ形式だが河原忠之とザ・カレッジオペラハウス管弦楽団が演奏したいずみホール制作の「フィガロの結婚」（12月）などが高水準の出来を示した。いずれも舞台上の視覚に惑わされず、音楽に没頭できるという良さがあった。

なお、来日オペラに関しては省略するが、その中で大野和士がリヨン歌劇場を率いて日本公演を行なった「ホフマン物語」（7月9日）の上演水準の高さは特筆すべきであろう。しかもそれが、山田和樹がスイス・ロマンダ管とともに来日公演を行っていたのと全く同じ時期だったことは、邦人音楽家の国際的活躍を物語る一例だろう。

ちなみに、毎年8月にびわ湖ホールで開催されてきたP・コンヴィチユニーの演出セミナーが2014年で終了したことは、それが若手の歌手と演出家を対象の一つのオペラを題材として微細な演出の実地指導を行なうという貴重な場であっただけに、惜しまれる。

●器楽部門

庄司紗夕香が90歳のプレスラーと協演、経験豊かな巨匠ピアニストと、それに寄り添う若い奏者との演奏が、不思議な温かい対話をつくり出した（4月）。コパチンスカヤはリフシツと組んで鋭角的な快演を聴かせ（6月）、ブルネロはルケシーニとのベートーヴェンのチェロ・ソナタ・ツィクルスをヒューマンな演奏で飾った（10月）。いずれもデュオの素晴らしさを味わせた演奏会である。一方、諏訪内晶子は「国際音楽祭NIPPON2014」を3月に仙台・名古屋で、12月に横浜・名古屋・郡山で開催。これはオーケストラとの協演やりサイトル、室内楽、公開マスタークラスなどを含み、作品の世界初演も織り込むという意欲的な音楽祭であった。来日ヴァイオリニストでは、ファウストがハーディング指揮新日本フィル（6月）と、またテツラフがP・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィル（12月）と、いずれもプラームスの「ヴァイオリン協奏曲」を迫真的な演奏で披露したのが印象に残る。ピアノではエマールが劇的な「平均律クラヴィア曲集第1巻」を（10月）、ペライアが清涼なモーツァルトの協奏曲を（11月）演奏した。プレトニョフが日本で久々の演奏を聴かせたが、彼がピアニストとして復活するきっかけがKAWAIのピアノとの出会いにあったというエピソードが興味をかき立てた（5月）。

●記念年の作曲家

伊福部昭の生誕100年に因み、井上道義指揮日本フィル（2月27日）、高関健指揮札幌響（5月30日）、大植英次指揮東響（5月31日）などが彼のオーケストラ曲を演奏、一部はライブ・レコーディングされ発売された。またR・シュトラウスも生誕150年の記念年に当たっていたが、演奏会ではかなり多くの作品が取り上げられたものの、オペラは「アラベラ」が新国立劇場（5～6月）と首都オペラ（10月）で、また「ナクソス島のアリアドネ」が新国立オペラ研修所（3月）とPMF（7月）で上演されたのみにとどまるという低調さであった。